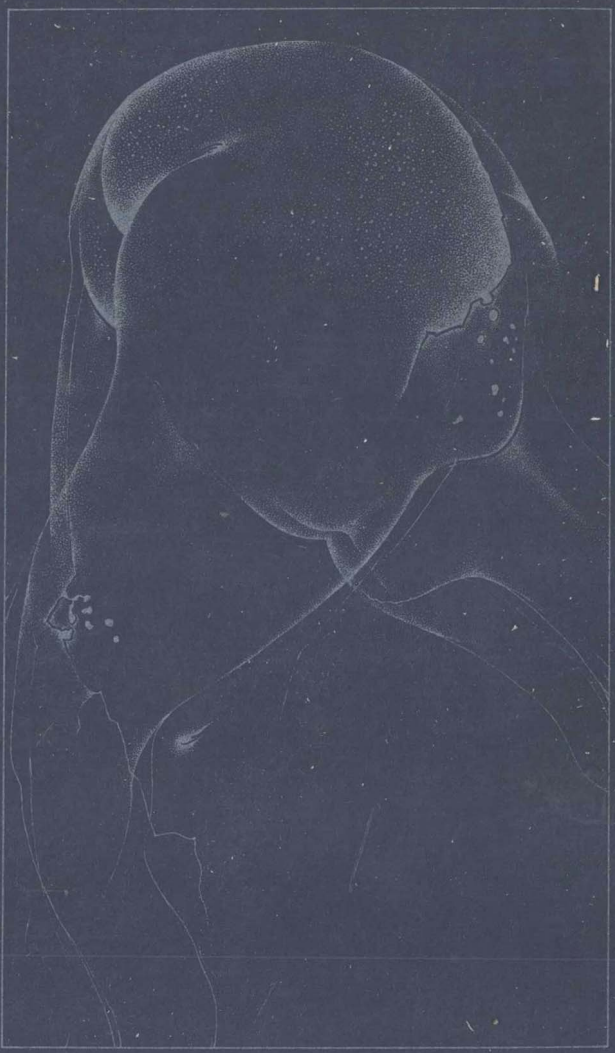
乱反射

三枝和子



乱反射（らんぱんしゃ）

昭和四十八年十月二十五日　発行
昭和四十八年十二月　十　日　二刷

著者／三枝和子（さえぐさかずこ）
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七十一
電話／東京（〇三）二六〇―一一一一
郵便番号／一六二
振替／東京八〇八
印刷所／東洋印刷株式会社
製本所／神田加藤製本

定価七八〇円

乱丁・落丁本はお取替えいたします
© Kazuko Saegusa, Printed in Japan, 1973

目次

二月十二日……7
二月十三日……59
二月十四日……109
二月十五日……157
二月十六日……203

装幀　斎藤和雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

乱反射

――太陽がぶあつい雲に遮られて光線が乱反射する曇り日には、物の形が奇妙にはっきり見える。しかしそうして光が相殺された（闇ではない）空間に在る物の形が、本来の物の形なのかどうかは分らない。

硝子のなかを鷗が飛ぶ

初めに在ったのは、あれは何だったろうか。
火花が……、熱くもなく目にも見えないが、火花が、胸のなかで散っている。歩く速度に合わせて、火花が胸を突き抜ける。
胸は灰色の空間。火花は胸を突き抜けるとき、ひとすじの刃に変る。風のぱったりと死んだ午後。物音がふいに遠ざかる。静かになったのではない。周囲には相変らずのざわめき。クレーンの上下する……男たちの怒鳴りあう……焼玉エンジンの爆ぜる……それらもろもろの混じりあった物音。そのなかの突然の真空。
たとえば其処は港。
たとえば、それは彼。
彼、おそらくそう名付けてもよい真空。
港のなかでの物音の消える場所。
……彼は港にいる。ひとりだ。
冷たい空気の層が身体を締めつける。彼は身動きする。透明な空気の層が軋む。張りつめた気層の下には海。いま港は硝子になって輝く。硝子のなかを鷗が飛ぶ。鷗の翼の軋む音。鷗の翼はひとすじの刃の形だ。ひとすじの刃が斜めになって飛ぶ。
突然に太陽が輝く。鷗の翼の軋む音。一瞬、鷗は血塗れになる。硝子のなかを血塗れになって斜めに飛ぶ。血塗れの翼を振りながら、鷗はいつまでも飛び続ける……。

二月十二日

「――」

彼は、叫び声を喉の奥で潰した。突堤の向う側から、眉を寄せて不機嫌な表情で歩いて来るのは、間違いなく彼女だった。約束の時間は既に二十数分も過ぎて居り、ほとんどあきらめていたせいか、彼はかえってひどく狼狽えてしまった。

「やはり、来てくれたんだ」

身体の内側を激しい痛みを伴った戦慄が走り抜けた。視野のなかの彼女の姿が、一瞬、小さくかすんで見えた。

「――」

彼女が、ふと立ちどまった。自分を凝視めている彼の視線に気づいたのか、軽く肩をすくめて見せた。それから、彼の注視を払いのけるような乱暴な早足になり、大股に、一直線に近付いて来た。

「どうしたの。何のためにこんなところへ呼び出したの」

にこりともせず、ひといきに言った。怒っている様子には見えなかったが、鋭い口調だった。急いでやって来たらしく、息を弾ませていた。彼は黙ったまま、この従姉の引き締って敏捷そうな頬のあたりを、そっと偸み見た。

彼女はコートを脱ぐと、ゆっくりと額の汗を拭いた。長い髪の毛が二筋、三筋、額に貼りついていた。彼女がハンカチを動かす度に、セーターの上半身が彼のすぐ目の前で揺れた。セーターがぴったりしているせいか、身体の曲線の動きが、変になまなましい。

「だけど……」

彼女は言った。

「まさか、心中しようなんて言い出すんじゃないでしょうね」

「……？」

彼は驚いて彼女の顔をのぞきこんだ。目は笑っていたが、冗談を言っている口調ではなかった。

「いやだわ、わたし、あなたと心中なんか……」

「そんなんじゃない」

彼は思わず強く叫んだ。

「そんな積りで呼び出したのじゃない」

「……」

彼女は薄く唇を歪めた。

「じゃ、どんな積りなの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「怒っているのかい」
「怒ってはいないわ。ただ、無意味だと思うのよ」
「何が？」
「……」
彼女は首を振った。遠くを凝視める表情になった。
「ねえ、何が無意味なんだい」
「……」
「ぼくたちのこと？」
「……」
「ぼくと、こうした関係を持ち続けることが嫌になったのだね」
「……」
「ぼくは、好きなんだけど」
「いいわよ、そんなふうに言わなくったって」
「ぼくは、好きなんだ」
彼は繰り返した。
「それだけは、嘘じゃない」
「じゃ、それ以外のことは、嘘なの」
彼女は正面から彼を直視した。彼は怯んで目を伏せた。
「わたし、誤魔化しは嫌いよ」

「ぼくだって、嫌いだ」
「……」
彼女は唇を歪めた。何かを言いたそうにして止めた。二、三歩、歩き出し、思い出したように外套を羽織った。沖に向ってゆっくり深呼吸した。
「ねえ、あれに乗ってみましょうよ」と突然に大声を挙げた。びっくりするほど華やかな声だった。
「あれ、あの船、遊覧船でしょう。心中する代りに、あれに乗って遊びましょうよ」
「……」
彼は黙っていた。遊覧船になど乗りたくはなかった。彼女は遊覧船に乗って誤魔化すつもりなのだ。この問題から逃げ出すつもりなのだ。
彼女は歩いていく。五、六歩先を、踵がアスファルトを蹴る柔らかな音。彼は拳を握り締めている。掌の内側が熱く濡れて来るのが分る。言いたいことがいっぱいあるのに言えないでいる。
「どうしたの」
彼女が振りむく。
「やっぱり心中がしたいの？」
それから声を出さないで、はればれと笑う。笑うと眼のなかに悪戯っぽい光が走る。
「あなたとは、死なないでこれからもつきあいたいわ」
「冗談だと思っているのかい」

「何が？　心中のこと？」
「心中だなんて、言ってやしないじゃないか」
彼は思わず泣き出しそうな甲高い声になる。
「馬鹿ねえ」
彼女は外套のボタンをはずす。彼の肩に手をかける。ケープの形をした袖のない外套のなかへ、少し伸びをするような恰好で彼の肩を包みこむ。
「馬鹿だわ、本当に」
「ぼくは真剣なんだ」
「わかってるわ」
「しかし……」
「真剣じゃないなんて言ってやしないわよ」
「……」
「あなたは真剣だわよ。だけど自分が真剣にやってることがいったい何なのか。それがちっとも分ってやしない」
「分ってるつもりだけど……」
「そお？」
彼女の頬が僅かにひきつる。無理に笑顔を続けようとしているのか。
「分ってるんだ、ぼくにはちゃんと……」
彼は勢いこんで口を滑らせてしまい、失敗ったと思う。しかし言い止めるわけにはいかない。

「あの男のせいなんだ。あの男が好きなんだろう」
「……」
彼女は、はっとした様子で黙ってしまう。顔の色が急速に蒼ざめていくように思える。ふいにヘリコプターの音が頭上を喧しく過ぎていく。彼女は凝っと目を閉じている。
「あの男が好きなことは、いいんだ」
彼は言ってから、自分自身、急に悲しくなる。こんなはずじゃないんだ。悲しくなったりしたのじゃ恰好がつかない。彼は首を振る。きっぱりしなければならないと思っている。
「ただ、あの男のせいで、ぼくと別れるのか、どうか……」
「わたし、そんなふうに言った？」
彼女は彼を遮って強く言う。目は閉じたままだ。
「そんなふうには、言わなかったわ」
「じゃ、なぜ？」
「……」
「なぜ、別れようなんて言い出すのか。理由を言ってくれ」
「……」
「言えないのかい」
「……」
彼女は目を開ける。一瞬、鋭い光がその眼のなかをよぎる。
「あなた、それをわたしに言えというの」

「ああ」
彼は一歩踏みこむ気持で言う。彼女は、ゆっくりと首を振る。
「言えないわ」と蒼ざめた顔のまま繰り返す。「理由は言えないけど、わたしを助けると思って別れてほしいわ」
「そんなに、ぼくが嫌いなのかい」
「嫌いじゃないと言ったでしょう。だからつきあったのよ」
「じゃあ……」
「いやなひと！　本当に執拗いのね」
彼女は乱暴な動作で歩き出す。
「待ってくれ」
彼は追いすがる。惨めだな、ぼくは追いすがっているという思いがちらりと頭を掠める。しかし引き返すことができない。自分の陥ちこんでいる場所が分らなくなり、事態が混乱して来る。
——彼女を愛さないようにして身体の関係だけを続けなければならない……いや、そうじゃない、愛したっていい、しかし怯むことはないんだ、ただ……。
彼は早足になった。彼女は、どんどん歩いていく。何かをふっきるような、決然とした歩きかただ。ヘリコプターが、再び頭の上へ舞い戻って来て轟音をたて始めた。

初めに在ったのは灰色の空間だったろうか。ふと気付くと、彼は、そのなかを歩いているのだった。

自分の姿は見えない。自分の姿が見えないのに、歩いている恰好が分るような気がするのは、おそらく魂の形を見ていたのかも知れぬ。自分の魂の在り処は、分る。噴きあがって来る怒りの手応えが確かなので、それは明瞭に意識できる。

火花が――、熱くもなく目にも見えないが、火花が、胸のなかで散っている。歩く速度に合わせて、火花が胸を突き抜ける。胸は灰色の空間だ。火花は灰色の空間を突き抜けるとき、ひとすじの鋭い刃に変る。

ひとすじの鋭い刃。

それは彼の殺意だ。殺意？　しかし殺意とは何か？　何にむかっての殺意なのか。――それは、摑めない。にもかかわらず、殺意は揺れ動いている。彼の胸の灰色の空間のなかで、ひとすじの刃となって。

彼は、ひとすじの刃を抱いて歩く。

真昼だ。

真昼にもかかわらず太陽は無い。ぶあつい雲の下には彼の歩いている灰色の道。視野は無限に拡がっていて、しかも何も見えない。ただ、自分の内心の怒りが、歯軋りの音をまじえながら、次第に、ひとすじの刃の鈍い輝きのなかへ収斂されていく、その疼痛が身内を貫く。

彼は立ちあがる。真直ぐに海へむかって歩きはじめる。輝く波頭のなかへ一直線に進んでいく。そのとき胸のなかの灰色の空間をよぎるひとすじの鋭い刃。ひとすじの鋭い刃の形をした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.